

2年後の振り返りからみる海外短期研修の体験と学び

- 2013年度海外フィールド演習「北米プログラム」の参加者の語り-

中 朋美*

Reflecting Short-Term Study Abroad Tour in North America: Students' Responses after Two Years

NAKA Tomomi*

キーワード：海外短期研修，異文化体験，振り返り，地域学

Key Words: Short-term Study Abroad Tours, Cross-cultural Experiences, Student Reflection, Regional Studies

I. はじめに

鳥取大学地域学部の「海外フィールド演習」の北米プログラムは2013年度から単位化され、正式なカリキュラムの一部となった。主な対象学年は2年生となっている。これは地域学部での1年目のカリキュラムで学んだ地域学についての基礎的な視点や、2年時に行われる地域調査実習の経験を活かすことのできるようにとの考えに基づいている。実際には様々な学年の参加者がいるが、2015年度末には2年生で海外フィールド演習に参加した学生の多くが卒業をむかえた。そこで、ここでは北米プログラムの2013年度の参加者の協力のもと、2年を経た地点でのプログラムについて振り返りを行い、プログラムについての評価と課題の考察を行う。

海外フィールド演習は、様々なテーマ設定で、学科の壁を越えて行われている。プログラム別に具体的な内容は異なるが、演習の目的の一つに、海外での地域をとらえるきっかけを与え、ひろく「地域」について考える場を提供することがある。ここ数年は、グローバル人材育成の必要性やそれに対する様々な支援のもと、海外に行ったことのある学生は以前よりも多いように感じる。しかし、学生の中には「地域」というと身近なローカルな場所や地元というイメージが強く、地域学部の学びを日本での視点に限定してとらえてしまうものもある。そんななか、海外フィールド演習は、教員とともに海外でのさまざまな現地調査を経験することによって、「地域」を多角的に考える場を提供するという役割がある。海外に出かけるというためらいを越え、国といった従来の枠組みを相対化したり、批判的に考えたりしながら地域に対する多角的なまなざしの重要性を少しでも学生に伝えることができればと構成されている。

こういった流れは、グローバル人材育成支援の多様化の流れとも合致する。教育や教育組織面の国際化の動きとして、文部科学省ではスーパーグローバル大学等事業を行っている。またトビタテ！留学 JAPAN では、ボランティアやインターンシップを含めた教育機関を越えた活躍を重視した支援がなされている。このトビタテ！留学 JAPAN の一部の地域人材コースに見られるように、国内の特定の地域との関係性を基盤としたものもあり、海外に出ていくことだけでなく、海外を視野に入れつつ、地域性を重視した人材育成の動きにも注目があることがうかがわれる。

*鳥取大学大学院地域学地域文化学科

他方では、海外にでかけること、特に海外フィールド演習のような短期的な海外体験にともなう問題点も指摘されている。短期間の訪問では、現地の社会や文化の多様性や複雑性が十分に認識できず、結果として訪問以前に持っていたステレオタイプを助長してしまうことになるとの指摘 (Riggan et al., 2011)、グローバリゼーションに対する安易で表面的な受け止めのみを促してしまうとの批判 (岡田, 2013, 吉田, 2011)、訪問を受け入れる側と訪問する側との間での知識不足や誤解、経済的、社会的な立場の違いから生じる関係の悪化 (Camacho, 2004, Doerr, 2013) などがある。このように大学や研究機関での学びや知を「外」につなげていくことに対して評価する動きもある一方、それに伴うマイナス面についても指摘も考えていく必要がある。

以下では、2013年度北米プログラム参加者の個別のインタビューとアンケートをもとに、プログラムに参加しての評価を、直後の振り返りと2年後の振り返りを比較しながら考察する。

II. 2年後からみる北米プログラム

1. プログラムと参加者の概要

北米プログラムは2012年にアメリカのカリフォルニアで行われたパイロットプログラムの後、2013年度から渡航先にカナダのバンクーバーを加えて毎年実施されている。2012年度からは、通常の授業がない2

月末から3月初旬の時期に実施している。また海外での研修の他に、日本でも事前に説明会、勉強会が行われ、参加者は北米社会や歴史についての知識を深める機会がある。

今回対象とした学生は2013年度に実施されたプログラム参加者である。この年には計8名が参加した。表1にあるように、当初の参加者内訳は地域文化学科と地域教育学科を含む男女で、このうち2名は1年生での参加者である。渡航経験もさまざまであるが、2014、2015年度の参加者と比較して、海外渡航歴がないものが多い(表2)。

本格的に単位化されて、はじめてのプログラムということで、その後のプログラム展開の基礎となった研修であった。北米の多文化社会 (Multicultural America) というテーマのもと、日系アメリカ、カナダ人の歴史と体験を中心にプログラムが構成された(表3)。学生は、課題として事前に関連の文献を読み、レポートを提出し、研修中には日誌をつけ、研修後のエッセイを書いた。一方、事前研修や研修中の課題等について、試行錯誤していた面もある。例えば、基礎的な北米社会についての知識は事前学習で補うことができたが、日系人の歴史や人種、エスニシティ等の更なる理解が必要であったこと、また研修中には振り返りの時間があまりとれなかった点などが、その後のプログラムで変更された。(中・ケイツ, 2015)。

表1 2013年度北米プログラム参加者内訳

	男性	女性	合計
地域文化学科	2*	5	7
地域教育学科	1	0	1
*は1年次での参加者、他すべて2年次参加者			

表2 参加者海外渡航経験

なし	4
1回	2
2回以上	2

表 3 2013 年度のプログラム日程

2013年	11月	参加者募集
	12月	航空券、先方との打ち合わせ
		事前勉強会（2月まで6回開催）
		出発前個人面談
2014年	2月27日	関西空港からサンフランシスコ経由でサクラメントに到着
	2月28日	Universit of California at Davisを訪問
	3月1日	Davisの街を散策、アムトラックで移動
	3月2日	Glide Memmorial Churchを訪問、市内散策
		サンノゼ鳥取県人会の小橋夫妻と会談
	3月3日	サンフランシスコジャパントウン散策
		Japanese Cultural and Community Center of Northern Californiaを訪問
	3月4日	チャイナタウンを訪問
	3月5日	University of San Franciscoを訪問
	3月6日	バンクーバーへ移動
	3月7日	University of British Columbiaを訪問
	3月8日	Nikkei Museum and Cultural Centreを訪問
	3月9日	チャイナタウン、ジャパントウンを訪問
		ガスタウンを訪問
	3月10日	日本に向けて出発
	3月11日	関西空港に到着
	3月20日	報告書、帰国後のレポートの提出
	4月	研修後の個人面談、単位認定

2013年度のプログラムについては、以前に事前、研修後の個別インタビューやアンケートで参加者からそれぞれの評価を集め、考察を加えている（Naka, 2016）。詳しくはほかの論文（中・ケイツ, 2015, Naka, 2016）に述べたが、文化の多様性についての理解を深めたという学生のコメントが多い。特に日系アメリカ、カナダ人の体験の多様性から「～人」といったアイデンティティの複雑性への気づきを体験したものが多かった。またいろいろな人の話を実際に聞いてみることによって、多面的に物事を理解することの大切さを知ったとするコメントもあった。さらに研修での体験によって、大まかな進路について考えを広げたものや、研修後に多くの日系移民を送り出した村を自分で訪れてみた学生もいた。アンケートでも異文化理解が伸びたとする回答が多い。また海外でいろんな人とコミュニケーションを取る経験を積んだことから、以前よりもグローバルな状況に対処する自信がついたという意見もあった。

2. 2年後の振り返り

こういった2013年度の参加者8名を対象に、2016年1月から2月にかけて連絡をとり、今回の振り返り調査協力をした。当時の2年時参加者は、卒論発表等で忙しい時期であったが、5名が個別インタビューに参加し、1年時参加者2名の協力も得ることができた。（表4）。合計では、個

別インタビューには7名、質問紙による調査には5名の協力を得ることができた。

表5は2年生時での参加者の大学卒業後の進路についてまとめたものである。地元一般企業に就職したものが2名、臨時も含め教員となったものが2名、就職せず、海外に転居予定のものが1名である。企業就職者と教員となったもの4名はいずれも出身地に戻る予定である。この中には転勤がなく、地元(鳥取、島根)で働くところからとの理由を挙げるものもいた。海外転居者は留学生で、卒業後は配偶者の転居に伴うことだった。教員となったものもいるが、これはこの年のことだけでなく、今後も一定数で考えられる。地域学部で英語圏での海外フィールド演習は北米プログラムだけということもあって、毎年英語の教員を目指す、あるいは教員免許を取得しようとする参加者が複数名いる。

いずれも、一見海外に出ていくこともなく、国を越えて活躍するグローバル的な進路ではない。むしろ地元での進路が中心となっている。しかしグローバル的な視野をもちつつ活躍する場合は、何も海外に出ていくことでもなければ、特定の職種につくことでもない。それよりも学生が、海外フィールド演習での体験をその他の地域学部での学びと関連させてどのように考えているのかの方が「地域」を多角的にみる地域学部での取り組みとしての海外フィールド演習の今後の展開や課題を考えるのにより有用な情報をもたらしてくれる。実際、参加者のコメントやアンケートを見ながら、海外フィールド演習での体験と参加者のその後の大学生活の関連についてみていく。

3. 北米プログラム後の変化

北米プログラム参加者の多くはその後、様々なゼミに属し、北米プログラムで取り上げたテーマに関連した研究や学習を続けるものは少ない。プログラム終了直後の個別インタビューや面談を除き、特に集まって何かするという北米プログラム関連のイベントもなかったため、研修を振り返るのほぼ2年ぶりという学生も多くいた。参加者の日常では、北米プログラムは「ああ、そういえば、そんなことが…」といった程度しか頭に浮かばないといった学生が多かった。だが、今回北米前後をふりかえてみると、プログラム前後で考えや取り組みが変化したといった声が聞かれた。

この年の参加者は全員が、初めてアメリカ、カナダを訪問した。そのこともあってか、以前から授業などで北米社会事情についてある程度は知っていたが、訪問によって各自の認識を新たにしたい意見が多い。例えばカナダといえば広い自然のイメージしかなかったが、様々な人種やエスニティーの人がいる多文化な社会であることを実感したとするコメントや、多様な日系アメリカ、カナダ人との出会いによって、単に顔かたちや話す言葉で「～人」という枠組みは決められるものではないと体験としてわかったとのコメントがあった。

このようなエスニティーや人種の複雑性の理解や多文化社会への認識の深化についてのコメントは、プログラム後の2014年春に行われたフォローアップ調査でもでてきた。このためもあってか、2年後のインタビューでは、直接的なテーマに関連した具体的な認識の変化の例を挙げるというよ

表4 2年後の個別インタビュー参加者内訳

	男性	女性	合計
地域文化学科	2 (1)	5 (4)	0
地域教育学科	0	0	0

()は質問紙にも回答した人

表5 2015年度卒業の参加者進路

		卒業後の所在地
民間企業	2	鳥取
教員	2	鳥取、島根
その他	1	海外

すべて女性参加者

りも、より広い認識や取り組みの変化を語る参加者が多かった。

例えば、それまでにもアメリカやカナダに興味があったが、その中心はファッションなどだったと話す学生は、その後社会的な側面に興味に移ったという。ファッション雑誌はあまり見ず、むしろニュースなどでてくる事件や選挙について調べてみたりするようになったという。また文化の持つ社会的な重要性を感じて、今まであまり興味がなかった文学の授業をとってみるなど、以前よりも関心の範囲が広まったと語った。この学生のように、以前よりも北米やその他の海外事情について興味が広がったとする声があった。

関心が広がっただけでなく、自分から何か行動をおこしてみたという学生も多くいた。例えば、2人の学生は、北米プログラムでの体験から卒業論文のトピックを決めたと語った。このうちの一人は、スペインの入植者の影響が現在でも見ることができるサンフランシスコのミッション地区の教会の墓地を訪れた経験から、もう一人はアメリカで感じたトイレでの違和感からそれぞれ卒業論文の研究テーマへと展開させた。両者ともアメリカやカナダの文化や社会を取り上げたのではないが、何らかの着想を得たとする点が興味深い。

このほかにも、北米とは直接関係がないかもしれないが、自分なりに何かをしてみたという回答もいくつかあった。プログラムである程度外国でも意思疎通ができるとわかったので、家族旅行やその他の旅で知らない人とも話をするようになったとする学生もいた。文化財に興味のあるこの学生は、一人で日本各地の文化施設を訪問し、そこでの職員の人にお話を聞いたことや、またそういった訪問の際や旅行中であった外国人とも話をするようになったという。さらに、北米プログラムで日系人の人に会い、学んだ体験を鳥取のイベントやその他のあつまりで何回か話したという学生もいた。彼女は2014年のプログラム終了後の調査時点では、日系の人からお話を聞いたプログラム体験から、伝えることの重要性を感じたと語っていた。そういったことをもとにして、その後実践に移した様子がうかがえる。彼女はさらに、北米プログラムとその後の体験は就職活動の時にも話題となり、大学時代の自分の取り組みを伝えることができたと言った。

学生が述べたこのような変化は、北米プログラムがあったから生じたというものでは必ずしもないだろう。むしろそれよりも、その後の大学での授業やゼミでの指導、そして大学以外での経験を積んでいくことによって、相乗的に引き起こされたと考えられる。直接的な因果関係はともかく、このような語りは、2年後学生が振り返ったとき、北米プログラムの体験がどのように語られるかについて、垣間見させてくれる。学生によってさまざまな形をとっているが、北米プログラムの参加が、自分と「外」とのかかわりにおいて、いままでとは違う認識や行動と関連させてとらえられていることがうかがわれる。

また、北米プログラムが卒業研究のテーマ決定に大きな影響を与えたとする学生のように、海外に出かけるという経験が、自分の身の回りについて新たな視点で検討してみるきっかけや後押しとなった場合もある。異なる環境下での調査や人々との出会いは、普段あまり考えない自分の社会的、文化的慣行やものごとの考え方が必ずしも不変のものではないことに気づくことになったともいえるかもしれない。海外フィールド演習での体験は、2年後には「外」だけでなく「内」に向けての変化とも関連して語られている。

4. 異文化への理解と対応

参加者には、質問紙で問題発見力や、様々な環境の下でも自分なりに対処できる自己管理能力などさまざまなスキルや能力の自分なりの評価（4段階で評価）もしてもらった。回答の全体数も少な

く、解釈や分析にも限界があるが、2年後の調査でも異文化理解、受容力が伸びたと答える学生が多かった。日本語の能力や移住・移民となった体験が異なる日系人の方々から、多様な文化的なルーツに対する考えに接したこと、そしてその他にも多くのアメリカ、カナダ人との出会い、大学や博物館といった施設や町での様々な取り組みを経験から、文化の複雑性について学んだ点も多かったと思われる。

また個別のインタビューでは、そういった経験からその後、異なる文化、社会的な背景を持つ人との出会いを積んだ話も多かった。留学生の日本語パートナーとなった人、また県内外での外国出身の人と友達になった人、短期滞在の外国人の言語的なサポートをしたと語った人がいた。また、国際交流のイベントに参加したといった学生は4名いた。異文化に対する受容や理解力のもつ意味にはさまざまな解釈があるが、参加者は様々なレベルで、文化や社会背景の異なる人たちとのかかわることに伴う、ためらいや壁に対応できているのかもしれない。

2年後の評価が逆の方向に変化したものもある。2年後の回答を見ると、直後には伸びたと思われた英語のスキルへの再評価がみられた。北米プログラムは語学研修ではないので、この点についての解釈は難しい。しかし、現地調査や現地のひととのやり取りをするにあたってのコミュニケーションスキルの一面についての参加者の反応をうかがわせる資料の一つともいえる。

会話や聞き取りなど、それぞれの参加者によって評価が変わった具体的な項目は異なるが、向上したとした回答から、変わらなかったと評価が変化しなかった回答がいくつかあった(25項目の回答のうち、2年後に評価が変化しなかったもの18、低下したもの5、向上したもの2)。プログラム参加直後は、実際に英語で調査したという記憶が新しく、聞いたり、話したりする英語の力の向上があったという回答が多かったのかもしれない。自己評価なので、実際の能力の変化があったというよりも、時の経過に伴いそれほど英語力は変わらなかったという印象の方がやや強く表れたと考えるべきかもしれない。3、4年生となると、英語は必修ではなく、自分から積極的に機会を作らなくては英語に触れること自体が少なくなってしまう。また北米プログラム後、英語や英語資料を用いた勉強会を開くことがなかったことも関連しているのかもしれない。

個別に尋ねたところ、TOEICといった語学能力試験や資格試験を受けた人は、7名中3名で、うち2人は1年生参加者で必須であった2年次でのTOEIC受験をし、残り1名はほかの語学研修参加のために受けたとのことだった。英語の能力向上を図るために自分から受験したというよりも、何等かの必要性があって英語の試験を受けた傾向がある。このほか英語に興味があった学生の一人からは、北米プログラムに行った後、英語を学ぶ気持ちがうすれたとのコメントがあった。現場で英語を使ってみる前には準備したが、実際に使うことができたというある程度の達成感を感じたこと、そして関心が英語そのものよりも、文化といったその他のものに移ったからかもしれないとの説明があった。

海外フィールド演習は、語学の向上を目的としたものではない。しかしこういった傾向は、学んだことや考えたことを持続的に深める継続的な機会の重要性をうかがわせるものともいえる。自発的に機会をとらえようと思う事柄や関心事がある一方、英語のコミュニケーションスキルのように、継続的なサポートがあってはじめて持続的に取り組めるスキルなどもあることがうかがえる。

III. 2年後からみる北米プログラムの展望と課題

今回の個別のインタビューと質問紙の回答から、研修の体験が時の経過とともにどのように評価されるのかの一端を見ることができた。2年後の振り返りで、参加者は北米プログラムの体験を自

分とは異なる社会や文化への認識や関心の広がりや、今まで深く考えなかった自分の周りについて考えを深めたことと関連させて語っていた。参加者が語った内容は、北米プログラムだけが要因ではない体験の方が多いかもしい。しかし大学の学びにおいて、北米プログラムがどのような位置づけがされる可能性があるのかを指示してくれる。また冒頭にあげたステレオタイプや表面的なグローバリゼーションの理解の助長してしまうのではないかという懸念は、今回の参加者にはあまり当てはまらないことがわかる。

多くの参加者にとって、北米プログラムでの学びを意識的に振り返ることは、プログラム以後初めてとなった場合が多かった。またプログラム後、参加者を中心とした勉強会といった研修プログラムでの気づきを継続させる機会の積極的な提供もあまりなかった。そんな中でも、異文化理解やその対応力といったように、参加者が自主的に機会をとらえるなどして、その重要性を研修後も引き続き認識しつづけているものもあることがわかった。一方、英語能力の評価のように、きっかけがないとその後が続いていかない気づきやスキルもあることがうかがわれた。海外フィールド演習で学んだ具体的なことを継続して研究していく必要はかならずしもないが、参加者が海外フィールド演習での学びをそれ以外の大学生活での学びの中に組み込み、生かすことができるのかについて検討していくことが、今後必要だと思われる。

引用文献

- Camacho, M. M. (2004) "Power and privilege: community service learning in Tijuana," *Michigan Journal of Community Service Learning*, vol. 10, no. 3, pp. 31-42.
- Doerr, M. N. (2013). "Do 'global citizens' need the parochial cultural other? Discourse of immersion in study abroad and learning-by-doing," *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, vol. 43, no. 2, pp. 224-243.
- Naka, T. (2016). Encountering others in overseas study tours: An examination of educational potentials. *International Journal of Social Science and Humanity* 6(9):714-718.
- 中朋美, ケイツ・キップ (2015) 北米からみる「地域」と大学での学び—海外フィールド演習『グローバル時代における北米の多文化社会』の一考察—, 地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要) 12(2):197-210.
- 岡田知弘 (2013) 「グローバル人材を地域の視点で考える」, 『公共空間』 Autumn: 13-15.
- Riggan, J., Gwak, S., Lesnick, J., Jackson, K. and Olitsky, S. (2011) "Meta-travel: A critical inquiry into a China study tour," *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, vol. 21, p. 238.
- 吉田文 (2014) 「グローバル人材の育成」と日本の大学教育：議論のローカリズムをめぐって, 『教育學研究』 81(2), 164-175.

(2016年9月30日受付, 2016年10月7日受理)